



Title	絵入狂言本『松波少将通車』考：加賀掾正本『河内通』並びに近松浄瑠璃との類似点をめぐって
Author(s)	細川, 久美子
Citation	フィロカリア. 2026, 43, p. 21-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104648
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

絵入狂言本『松波少将通車』考

―加賀掾正本『河内通』並びに近松浄瑠璃との類似点をめぐって―

細川 久美子

はじめに

- 一、絵入狂言本『松波少将通車』について
- 二、宇治加賀掾正本『河内通』について
- 三、『松波少将通車』第一口明と『河内通』第一との関連
- 四、『河内通』の見せ場における趣向と『松波少将通車』の見せ場における役者の芸
- 五、『松波少将通車』第一口明と近松浄瑠璃『天智天皇』第三における人物造形の類似
- 六、近松歌舞伎と富永平兵衛歌舞伎における「恋争い」
- 七、京、三座における「毒薬（酒）」の趣向の競演
- 八、『松波少将通車』における近松関与の可能性
おわりに

はじめに

元禄四年（一六九二）度、京都、村山平右衛門座上演の歌舞伎「松波少将通車」^{〔三番続き〕}は絵入狂言本（大阪大学附属図書館、赤本文庫所蔵・100）が存する。本書の翻刻は、土田衛編『上方狂言本七』（古典文庫409、一九八〇年）に、解題と解説は、日本書誌学体系112『絵入狂言本総覧』（青裳堂書店、二〇二五年）に、上演年時の考証は、土田氏「歌舞伎年表」補訂考証 元禄篇 其二（『愛媛大学法文学論集 文学科篇』4、一九七二年）に備わる。

本論文では、本作第一口明の筋の展開は、宇治加賀掾正本『河内通』^{〔元禄初年頃〕}第一の筋の展開と近似するが、主人公をめぐる御台と妾が「恋争い」する共通場面において、主として妾の台詞に相違点が見出せることに注目する。絵入狂言本の伝本が稀な元禄初年におけるこの様な歌舞伎と浄瑠璃の関連は、両者の交流の様相を

探る上で看過できないからである。

続いて、浄瑠璃『河内通』と歌舞伎『松波少将通車』では、それぞれの様な趣向や役者の演技が見せ場とされたかを明らかにする。

また、元禄四年度は、京三座の絵入狂言本（村山座『松波少将通車』、早雲座『二谷坂落』、『娘親の敵討』、都万太夫座『四国辺路』）が揃い、この頃、大坂、竹本座では近松浄瑠璃『せみ丸』、『天智天皇』等が初演され、評判を得ている。そこで、これらにも目を配ることによって、元禄初期の上方劇界では、二人の女の「恋争い」や「毒菓（酒）」の趣向が競演されていたことを指摘し、その中での本作の特色から、本作の意義（作者）を考察したいと思う。

一、絵入狂言本『松波少将通車』について

絵入狂言本『松波少将通車』（大阪大学附属図書館、赤木文庫所蔵、目録番号…100）の書誌は、以下の通りである。⁽²⁾

〔体裁〕	半紙本、一冊、袋綴、替表紙、全一二丁
〔題簽〕	欠
〔見返〕	半丁
〔題〕	まつなみせうしやうかよひくるま 松波少将通車
〔並書〕	付井 おもひにくゆるまののそらだき つらさに替るそでのすみぞめ
〔番題〕	上 いひつたへたるむこは子ならず 中 ふきつたへたる家のひちりき 三番続 下 き、つたへたるうつしゑすがた

〔行数〕	一五行
〔内題〕	第一 松波少将通車 まつなみせうしやうかよひくるま 村山三番続
〔柱刻〕	かよひ 三（十四）
〔挿絵〕	全七頁（見開き三、片面一）
〔刊記〕	八文字屋八左衛門新板

本作は、元禄四年度（上演月は不明）、京、村山平右衛門座で上演された歌舞伎である。作者は未詳。内容は松波家のお家騒動と敵討である。役人替名付に記された主な登場人物と配役は次の通り。

松波少将清さだ	立役	村山九郎右衛門
御台みしま姫	若女方	玉川半太夫
妾おつね	若女方	松本兵藏
松波大ぜん	敵役	小野山宇治右衛門
家老のたにくらんど	立役	藤川武左衛門
しほがまだん六	若衆方	桜山林之介
ぜんにう法師	立役	音羽次郎三郎
安楽寺和尚	道外方	天上又右衛門
百姓	半道	田島半兵衛
隠居の亡魂	軽業	長崎色の介

〔表1〕絵入狂言本一覧（元禄六年度迄） 方籤なしを×で示した

上演年月	外題	名代	座本	版元	作者	署名
貞享四	あすか川	京 岡村	不明	山本九兵衛		×
貞享四	兵部卿物語	京 万太夫	不明	山本九兵衛		×
貞享五	大織冠	坂 松本名左衛門	不明	西沢（大兵衛）		×
貞享五	大隅川源左衛門	京 万太夫	坂田伝内	鶴屋喜右衛門		×
元禄二	和歌浦片男浪	京 不明	不明	八文字屋		×
元禄三・四	金岡筆	京 万太夫	山下半左衛門	八文字屋		×
元禄三・四	越中国立山權定	不明	不明	八文字屋		×
元禄三・四	一谷坂落	不明	不明	八文字屋		×
元禄四	松波少将通車	京 早雲	大和屋甚兵衛	八文字屋		×
元禄四	娘親の敵討	京 村山	村山平右衛門	八文字屋		×
元禄四・秋カ	娘親の敵討	京 早雲	大和屋甚兵衛	八文字屋		×
元禄四・9	四国辺路	京 万太夫	山下半左衛門	八文字屋		×
元禄五	娘孝行記	京 万太夫	山下半左衛門	八文字屋	富永平兵衛	方籤
元禄五・秋カ	鹿島之要石	京 万太夫	山下半左衛門	八文字屋	富永平兵衛	方籤
元禄六・1カ	大宮人初しまた	京 万太夫	山下半左衛門	八文字屋	近松門左衛門	内題下
元禄六・3	仏母摩耶山開帳	京 万太夫	山下半左衛門	八文字屋	近松門左衛門	内題下
元禄六・二の替	仏母摩耶山開帳	坂 不明	岩井半四郎	正本屋九兵衛		内題下
元禄六	丹波与作手綱帯	京 村山	村山平右衛門	八文字屋	富永平兵衛	内題下
元禄六・頃	若後家児手柏	京 村山	村山平右衛門	八文字屋	富永平兵衛	内題下
元禄六・6・8	好色伝授	京 早雲	歌仙十郎兵衛	菊屋七郎兵衛	小島彦十郎	初丁
元禄六	心中八島	京 村山	村山平右衛門	山本九兵衛	富永平兵衛	内題下

〔表1〕は、元禄六年度以前に刊行された、現存する絵入狂言本の一覧表である。表で示す通り、元禄初年以前の絵入狂言本の伝本は稀であり、かつ、元禄四年以前の絵入狂言本には作者の名が見られない。作者富永平兵衛の名が脇方籤に見えるのは元禄五年度から、近松門左衛門の名が内題下に見えるのは、元禄六年三月上演の『仏母摩耶山開帳』からである。

だが、二人はそれ以前から歌舞伎を作劇していたことは、次に挙

げる役者評判記の評文や芸談より明らかである。当時、劇界における作者の地位は低かった為、作者の署名は批判されており、絵入狂言本（内題下・役人替名付）に作者名は明記されなかったと思われる。

『野良立役舞台大鏡』（貞享四年（一六八七）正月刊）

おかしたいもの」南京のあやつり 近松が作者付」

：又ある人の曰よい事がまじう上るり本^二作者かくさへほめられぬ事じや^一此比はきやうげんまで^二作者を書刺芝居のかんばん辻ぐ^一の札^二も作者近松と書しるすいかいじまんとみへたり此人哥書か物語をつくらば外題を近松作者物語となん書給ふべきや^③

『耳塵集』下之巻（宝暦七年（一七五七）刊）

一 富永平兵衛ハ右弥五左衛門に次での作者にて。今顔見世の役者附に狂言の作者と書事富永平兵衛初而也。延宝八年（稿者注、一六八〇年）の暮の顔見世成りしが。其当座ハ諸人こぞつてにくめり。^④

ところで、土田衛氏は「近松歌舞伎狂言存疑本考」^⑤で、「元禄期には役者も作者も座本との一年間の雇用契約は確実に守られていた」「いずれの作者も自らが所属する座以外に執筆することはない」と指摘されている。すると、京三座の絵入狂言本が揃う元禄四年度の〔表1〕のゴチック体で記した三演目は、それぞれ誰が作者

として関与していたのか問題となろう。

但し、留意しておかねばならないのは、柳原玲子氏「絵入狂言本についての一疑問——娘親の敵討」と水木辰之助「餞振舞」^⑥で指摘される通り、絵入狂言本は歌舞伎の筋書きが絵入りで出版されたもので、梗概というには台詞が多いが、脚本と見做すには不備が多く、趣向の伝達に重点が置かれている。そして、歌舞伎の作者とは別の、出版界に属する者によって書かれているということである。

よって、絵入狂言本の資料的価値は、浄瑠璃正本や台帳等と比べると低いと言わざるを得ないのであるが、元禄歌舞伎の様相を明らかにするには、役者評判記にみえる断片的な記事と、筋や趣向を伝えるにすぎない絵入狂言本を利用するしか方法がないのである。

幸い、元禄四年度上演の『松波少将通車』に関しては、二種の役者評判記、元禄五年二月刊、岩瀬本『役者大鑑』^⑦（元禄八年までの評を含む）と同年力刊『役者大鑑合彩』^⑧（元禄五年力刊「漢数字丁」と元禄三年春、大坂で刊行された「いろは丁」を合綴^⑨）が存する。そこで、まず、本作との関連が見出せる加賀掾正本『河内通』、並びに、右の役者評判記の評文を、絵入狂言本『松波少将通車』と対照しながら、本作の趣向や本作の見せ場での役者の演技を探っていき、そこから本作の成立背景を考察していく。

一、宇治加賀掾正本『河内通』について

宇治加賀掾正本『河内通』（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵、

107-00230）の書誌は、次の通りである。

〔体裁〕	半紙本、替表紙
〔内題〕	河内通
〔段数〕	五段
〔所属〕	宇治加賀掾
〔行・丁数〕	八行・四十九丁
〔版元〕	山本九兵衛
〔挿絵〕	なし

宇治加賀掾が語った浄瑠璃である本作は、山本九兵衛板の絵入十七行本（天理大学附属天理図書館所蔵、9117-1297）も存する。翻刻と解題は、『古浄瑠璃正本集 加賀掾編』第四（大学堂書店、一九九二年。担当、松井静夫氏）に備わる。作者は不明である。

本作の刊行年は、『近世邦楽年表 義太夫節之部』^⑩に「元禄初年ごろの刊行と覚しき加賀掾の正本に河内通あり」と記され、信多純一氏「宇治加賀掾年譜」^⑪でも、加賀掾段物集『紫竹集』第六に所収される本作（「しらつゆ姫道行」の配列からこの説が支持されている）すなわち、「表2」は『紫竹集』第六・第七の目録（丸囲い数字と傍線は、稿者）だが、①②③の『凱陣八嶋』は貞享二年に大坂、道頓堀で初演され、⑥⑦の『紀三井寺』は八行本末尾に貞享五年弥生と記され、⑨の『伊勢御遷宮』は元禄二年九月の内宮、外宮の御遷

〔表2〕『紫竹集』第六・第七目録

（傍線部分は稿者）

『紫竹集』第六 目録			
① 凱陣八嶋	つくり山伏道行	⑪ 隅田川	きやう女道行
② 同	くはんじんちやう	⑫ 巴太鼓	宇治せた高名物語
③ 同	せつたい	⑬ 同	たねなをみちゆき
④ 葵上	石山まふで道行	⑭ 同	たいこのきよく
⑤ 同	きぶねまふで	⑮ 長谷観音	しのだづま道行
⑥ 紀三井寺	ひぎやうのこま	⑯ 頼家鞠始	まりのきよく
⑦ 同	中宮道行	⑰ 同	まんじゆの前道行
⑧ 忠臣身替物語	かしはのまへ道行	⑱ 牛若武勇始	都町づくし
⑨ 伊勢御遷宮	あきこのひめ道行	⑲ 源三位頼政	たつたのまへ道行
⑩ 梅花垣	左七女房道行	⑳ 井筒	しらつゆ姫道行
『紫竹集』第七 目録			
① 曾我七伊呂波	虎少将みちゆき	⑤ 摩耶山開帳	かづらきみちゆき
② 同	かはづすまふ物語	⑥ 同	しんどく
③ 東山殿追善能	しぐれのだん	⑦ 和訓三部経	によぜ姫道行
④ 同	ふじ山十二けい	⑧ 同	双ろくのだん
（以下、略す。）			

宮、⑤⑥の『摩耶山開帳』は元禄六年三月の摩耶山開帳の当て込みが指摘されている。また、⑪『隅田川』へきやう女道行」と⑲『源三位頼政』へたつたのまへ道行」は、元禄三年八月刊（逸名道行揃）に所収されている。よって、『紫竹集』第六目録は、ほぼ年代順の配列と考えられ、⑳『井筒（河内通）』は元禄三、四年頃、つまり、『松波少将通車』上演より前か、近い頃の刊行（初演）と推量されるのである。

三、『松波少将通車』第一口明と

『河内通』第一との関連

絵入狂言本『松波少将通車』（三番続き）第一口明（前場）の筋の展開は、加賀掾正本『河内通』第一の筋の展開と近似している。〔表3〕は、両者の梗概を記し、傍線部分で近似する筋を、アルファベットでその対応を示したものである。なお、網掛部分は、両者の筋の相違箇所であり、注目すべき箇所をゴチック体で示した。以下、両者の筋の展開が近似することを述べていく。

『松波少将通車』（以下、『松波』と略す。）のAで、少将の御台みしま姫が、若衆姿で、夜に、夫の通う市原野に行き、香を空薫きするという設定は、『河内通』Aで、業平御台井筒の前が、男姿で、夜に、夫の通う河内に行き、香を薫じている設定と、人物名と場所が違うだけで共通する。次に『松波』Bの、八つの鐘が鳴るので御台が侍女を起こすのも、『河内通』Bの太鼓が七つを打つので御台は侍女を起こすのと近似する。続いて『松波』は、Cでつがいの鳩を侍女が捕えると、Dで庵から女（おつね）が出て来て、それは「手飼いの鳥」と答めるので、Eで御台は女と明かして事情を述べ、Fで二人は庵に入るといふ展開となるが、『河内通』も、Cで、井筒がつがいの鳩を抱き撫でていると、Dで白露が出て来て「手飼いの鳥」を見知らぬ男が抱いていると答めるので、Eで井筒は正体を明かし、Fで白露は井筒を館に誘うというほぼ共通する展開

〔表3〕梗概対照表

〔松波少将通車〕第一口明	〔河内通〕第一
A 松波少将の御台みしま姫は、若衆姿で、星月夜に市原野で松ヶ枝に空薫きしている。 B 鐘の音を数えると八つなので、御台は寝ている侍女を起こす。C 侍女がつがいの鳩を見つ、御台は「つがいの鳩を国を隔て放せば、妹背の縁を切るという。」 A 夫は五年以前、歌枕を見る為東に下った時に馴じんだ女を都に連れ上り、市原野に隠し置き、毎夜通っている。東の女との縁を切ろうとするのは夫の為だ。通わねば怪我もしない。鳩を捕えて」と侍女に頼む。 C 侍女は鳩を捕える。D 庵から女が腰元を連れ来て「その鳩は手飼いの鳥」と咎める。御台が、「返してやれ」と侍女に言う、女は「自らの鳩を取るのには訳がある。理由を聞かねば帰さない。」と言う。 E 御台が女と明かして事情を述べると、女は「騙された」と恨めしげな顔つきになる。御台が「私の身の上を聞き騙されたというのは、合点がいかない。事情を聞かねば帰らない。」と言うと、女は三歳程の久若を連れて来させ、「少将が白河へ下られた時、私の所に宿を召され、仮初の戯れにこの子が出来た。奥様はいないと言うので都へ上ったが、こうなる上は尼になる心底です。この子はあなたの子と思つて下さい。」と語る。御台が「私には子がない故、貰つて我子にしよう。あなたも屋敷に来て下さい。」と言うので女は有難く思う。F 皆庵に入る。 G 少将は市原野へ通い来るが、香の匂いを不審がり、「奥にやつた秘蔵の香炉がここにある訳がない」と言う。小姓が「奥様が市原野通いの詮議をするのでしよう。」と言うので、香炉の詮議をせずに、H 少将は庵へ入る。すると、若衆が出てくる。少将が「不義者」と搦め取り、提灯で顔を見ると、御台と腰元だった。少将は、御台に詫言をし、おつねにも共に詫びてほしいと頼むが、おつねは「奥様はないといったが」と逆らう。 H 少将が縄をほどくと、御台は「おつね殿と近付きになった。久若を貰い、おつね殿も屋敷へ伴う。」と言う。 雨中、頭に針がある鬼の様な者が来る。その者は、願有つて貴船参りする道心で、悪心故、親に勘当された御台の兄かくげんだった。少将は、皆とかくげんを連れ、屋敷に帰る。	A 在原業平の御台井筒の前は、男姿にやつし、夜に夫の通う河内に来ている。 B 太鼓が七つの時を打つので、井筒は寝ている侍女を起こす。 A 井筒は薫じている香を焚き止めようとするが、白露の館を見ると、胸の炎を冷ませずにいる。井筒は、大内より預かる香炉を取り違えて持つて来たと気付、松ヶ枝にかけた香炉を取ろうとするが、C 井筒はつがいの白鳩を見つ、手飼いにしようと思ふ。 業平秘蔵の初音の香の匂いがあるので、D 白露が走り出ると、手飼いの鳩を見知らぬ男が抱いているので咎める。井筒は男姿なのを幸い、白露の心を乱そうと濡れかかる。二世かけた男がいるという言葉に、「業平だろう、業平を討つ。」と井筒が駆け出すと、白露は「命かけて」と井筒の刀に縋り付く。 白露の確かな心に、E 井筒は正体を明かし、妬む心でないと語る。 F 白露は井筒を館に誘う。 G 業平は高安の白露の館を訪れるが、松ヶ根に大内重宝の香炉が置かれているので、白露に忍び男がいると疑い、籬に立忍ぶ。 H 白露が男を送り出すのを見た業平は、男に縄をかけ、白露主従も搦め取る。業平が「不義者」と言つて供の者に面改めさせると、井筒だったので罰悪く、縄を解かせる。 I 井筒は、男姿でここに来たのは怪気ではなく、君の野山の通い路が覚束なかったからで、白露の惚れ惚れする心と姿を知ったからは、I 白露を御所へ伴つてほしいと頼む。 業平は二人の手を取つて、御所に帰る。 途中、井筒に横恋慕する中納言忠興が、禁裏の宝物の香炉を野山に捨て置いたと、業平を責める。井筒は言訳をするが、業平は、いとこの忠興は奏聞しないと云い、皆を連れ帰る。

となっている。この後、『松波』は、Gでおつねの元に通い来た少将が香の匂いを不審がり、Hでおつねの庵から若衆（男）が出て来るので、少将は「不義者」と搦め取るが、御台であつたという展開となるが、『河内通』も、Gで、業平が白露の館を訪れると、松ヶ枝に香炉が置かれているので疑いを持ち、Hで白露が男を送り出すので、業平が「不義者」と言つて搦め取ると、井筒であつたという近似した展開となっている。そして、『松波』Iでは、御台は少将に、おつねと少将との間の子を貰い、おつねも屋敷に伴うと言つてゐるが、『河内通』Iでも、井筒は業平に、白露を御所に伴つてほしいと頼んでいる。

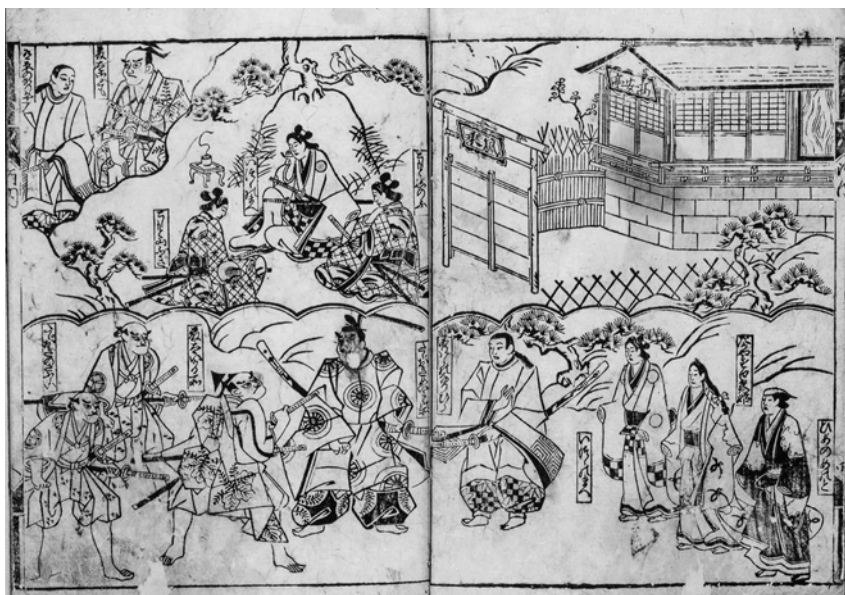
この様に、『松波』第一口明と『河内通』第一は、次の悪方が登場する場面までは、共に『伊勢物語』を取り入れた筋の展開が共通しており、一方が他方を利用した可能性が考えられる。

そこで、再度、両者の前後関係を検討する。『河内通』は、この後、井筒が置き忘れた大内重宝の香炉を、井筒に横恋慕する忠興が見つけ、譏奏した為、業平は東国に配流されるという展開となるが、『松波』は、香炉はこれ以後の筋に関係せず、少将は親殺しの罪で流罪となる。また、『河内通』第二・第三では、井筒は『伊勢物語』の和歌を次々と詠んでいくが、少将が歌枕を見に東国へ行き、京に帰つて来た後日譚である『松波』は、この後、『伊勢物語』との関係は全くなくなる。つまり、『河内通』の方が筋の整合性があり、内容からも『河内通』が先と考える方が妥当と思われるのである。



〔図1〕『松波少将通車』四オ・三ウ（大阪大学附属図書館、赤木文庫所蔵）

クリエイティブ・コモンズ表示-継承 4.0 国際ライセンス (CC BY-SA)
<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/deed.ja>



こしもとしのふ
いつ、のまへ
こしもと山ぶき
藤太御とも
有原のなり平

ひめのめのと
たかやす白露姫
いつ、のまへ
ありはらのなりひら
たゝおきめいわくの所
藤太いかる所
たゝおきのさふらい

〔図2〕『河内通』五オ・四ウ（天理大学附属天理図書館所蔵）

本図の転載・利用を禁じる。

すると、両作の相違点（表3）の網掛、ゴチック体部分）、つまり、『松波』が『河内通』の趣向を取らなかった箇所が注目される。『松波』の当該場面挿絵（図1）上段と『河内通』の当該場面挿絵（図2）上段には、共に香炉とつがいの鳩が左上に描かれているが、『松波』の方は『河内通』とは異なる、妾おつねが子を連れている図像が（図1）右上に描かれている。

この点については、後で詳しく検討することとし、次章では、悪方が登場してからの両作の異なる筋を追っていき、両作はそれぞれどの様な趣向や役者の演技を見せ場としたのかを窺っていく。

四、『河内通』の見せ場における趣向と

『松波少将通車』の見せ場における役者の芸

始めに、『河内通』の悪方忠興が登場してから後の筋の梗概を記し、本作の見せ場となる趣向、及び、眼目を考察する。

【第一・第二】井筒が置き忘れた大内重宝の香炉を、井筒に横恋慕する忠興が見つけ、業平は忠興に責められる。忠興に讒奏された業平は東国に流され、井筒は親元に預けられる。館の井戸に忍んでいた忠興が、井筒の弟に刀を押しつけ、井筒に靡けと迫る。刃向った井筒は、弟諸共、忠興に斬られて亡くなる。

【第三】業平が武蔵野に分け入ると、井筒と白露が現れ、嫉妬で髪を乱し罵り合う。辺りは地獄となり、業平は、前世で六欲



いつ、のまへのしれう
あらはる、所
白つゆひめのいきれう
ありはらのなりひら
なけき給ふ

ほうとうの内どくろ有
しらつゆのしうしん
天人(おしへ)給ふ
なり平おとろき給ふ
いつ、のまへせりあひの所
いつ、のまへのしうしやく
〔文字となる〕
かきはつこつに(うらみ)をいふ所

〔図3〕『河内通』十オ・九ウ (天理大学附属天理図書館所蔵)

本図の転載・利用を禁じる。

煩惱を断てなかつた餓鬼と、断つて十悪を出た天人に会う。業平が天人に二人の在処を尋ねると、黒雲から井筒の亡魂と白露の魂が現れ、二人は蛇形となり火焰を吐き争う。天人は、嫉妬に迷う白露を教化し井筒を深く弔えと諭し、業平を娑婆へ帰す。

【第四】白露はめのを伴い配所の業平に会いに行くが、長旅で足を痛め、便船を求める。船頭は人商人になった忠興に二人を売る。白露は舟から身を投げるが、めのは白露を抱き上げ、浮木に掴まり流されていく。浮木は、春日社に願をかけている業平の舟に近づき鹿となり、二人を舟に投げ込み、金色の託宣となる。再会した白露と業平は悦ぶ。忠興は業平家臣に捕えられる。

【第五】忠興は井筒のもう一人の弟に討たれる。酒宴中、勅使が業平勅勘御赦免を告げる。皆、武蔵野を立つ。春日社奉幣使の勅詔を蒙った業平は、春日社に天地長久の祈りをし、風流の舞を行う。

『河内通』第三では、井筒(死霊)と白露(生霊)の凄まじい「恋争い」が繰り広げられ、井筒の亡魂は、その後、恋という文字になる。この場面は、〔図3〕下段より、黒雲や人形にからくりが用いられ、それが見所だったと推量される。第四も、水上で浮き木が鹿、託宣と変化する水からくりの見せ場であったのだらう。元禄一〇年頃にはより大がかりになるが、元禄初年頃も、宇治座は加賀掾の語

だけでなく、からくりでも人気を得ていたと考えられるのである。

また、第三で、餓鬼と天人が、水風火土からなる人身は借り物で六欲煩惱の種を断つよう業平に語る場面も、本作の聞かせ所であったと思われる。凄まじい嫉妬の争いを見せて、それを戒め、教化する。これが、『河内通』の眼目であったといえよう。

一方、『松波少将通車』第一口明の悪方かくげんが登場する場面以降の筋の梗概は、以下の通りである。

【第一口明の切】異形の道心が来るが、それは、悪心故、親に勘当された御台みしま姫の兄かくげんだった。少将はかくげんと皆を伴い屋敷に帰る。【第一中入】松波家の小姓しほがまだん六は、念者である家老のたに藏人の浮気に恠気するが仲直りする。かくげんと母隠居は、御家乗っ取りを企み、樋からおつねの部屋まで穴を掘り、似せ狸になって少将親子を殺そうとしている。それを立ち聞きた藏人は、二人に続いて穴に入り、おつねを逃がすが、少将は隠居が化けた似せ狸を討ってしまう。少将は親殺しの罪で九州に配流、屋敷は閉門となる。

【第二口明】藏人の舅が娘を出家させ、藏人と縁を切り大膳（かくげん）側に就こうとするが、嫡子八三郎は父に意見する。藏人妻も帽子を脱ぎ、髪を切らず出家していい姿を藏人に見せる。藏人は、妻と八三郎を連れ帰る。【第二中入】ぜんにう法師は、筑紫の少将から預かったお家の重宝の筆簪を、しほが

まだん六ではなく、大膳に渡してしまう。大膳は「少将は首を討たれた。御台、若君は土佐に流罪」という偽宣旨を告げるが、だん六は閉門を破らせ、お家に乗っ取ろうとする大膳の企みを暴く。法師は、誤って筆簪を大膳に渡したと気付き、だん六諸共大膳に詰めかかる。大膳は逃げ、法師は大膳が父を討った敵と知る。

【第三】少将配流先の筑紫に下ったおつねは、旅の疲れで悪い、駕籠で通りかかった和尚に薬を貰うが、小僧が毒見すると手足が萎える。和尚は土砂と取り違えたと言い、少将を討てと寄こした大膳の書状を証拠に、都へ申し開きをするよう助言する。大膳は所の百姓に少将の絵姿を渡し、少将を捕えろと命じている。百姓共が据えた関を、少将は和尚を殿に仕立て、自分は馬子の出立ちで通ろうとするが、詮議される。和尚は機転をきかし、自分は大膳の家老と言って百姓を帰らせる。だん六が帰参の宣旨を告げ、城右衛門（ぜんにう法師）が大膳を討ち、皆悦ぶ所へ、似せ狸となって討たれた隠居の亡魂が現れ、恨みをなすが討たれる。皆、帰京し、松波の家は栄える。

この様に、『松波』では、悪方かくげんが登場した後は、『河内通』とは全く異なる、元禄歌舞伎お定まりのお家騒動と敵討の筋が展開しているのである。

ところで、元禄六年度、京、村山座上演『丹波与作手綱帯』（富

永平兵衛作)を翻案した、大坂、岩井座二の替『仏母摩耶山開帳』も『松波』と同様の作劇法がなされているが、土田氏は「狂言取り・趣向取り―元禄歌舞伎の場合」¹⁶⁾で、「津打治兵衛の場合」京都の、しかも上演されたばかりの当り狂言をそのまま取込んで「そこ／＼しぐみをかへて」(岩井半四郎さいご物語)大坂で上演するというのが、常套の手段であつた。…改変のきつかけを作つた最大の理由は、役者づかいの問題にあるのではないか」と考えられている。そこで、『松波少将通車』を演じた主要な役者の芸風や評判を、役者評判記で窺つてみた。(括弧内の四桁漢数字の上二桁で『歌舞伎評判記集成』第一期の巻数、下三桁で頁数を示した。傍線、太線部分は稿者。)

先ず、松波少将、御台みしま姫、妾おつねを演じた役者は、岩瀬本『役者大鑑』(以下、『大鑑』と略す。)で次のように評されている。(括弧内に、引用評文の刊行年月をアラビア数字で記した。)

松波少将清さだ…中ノ上(立役) 村山平右衛門

村山の世継男さるのとし(稿者注 元禄五年) 九郎右衛門を改め名まで平右衛門に成給…此ころはさのみひやうばんもなし…惣べつ役者の諸げいをみるに。よき事にもちゆればけい一きわよくみゆるものなり…むら山の跡目よき役目のみつとめたまは、諸げいしあげらる、事もあるへきやう

(元禄5・2、一三三九)

御台みしま姫…上 若女かた 玉川半太夫

そのうつくしき中にも市川かをり松もと兵藏うへ村井づ、富澤さまの介。さては玉川の君諸げいはしらず当代美人の四天王ひとり武者の五人なるへし…此君近年しつかりとおも役をつとめたまはぬゆへ。ひいでたる事もなし(元禄5・2、一三四七)

妾おつね…中ノ上 若衆形 松本兵藏

女形にしても若衆形にしてもめんていうつくしく出たちばへがすれはふたのかさり物…すい分情をいたしてむかしにかはらず上文字に成給へ(元禄8・2、一三六四)

太線部分で示した通り、少将役を演じた村山九郎右衛門は、翌年(元禄五年)度、親から村山座の名代と座本を譲られ村山平右衛門を名乗っている。¹⁷⁾ 御台を演じた玉川半太夫と妾おつねを演じた松本兵藏は、美しい女方五人の内に数えられており、兵藏は、『役者大鑑合彩』(以下、『合彩』と略す。)に「御親父名左」(一三九四)と記される通り、大坂の名代松本名左衛門の子であつた。『松波』の冒頭場面で、『河内通』が利用され、少将の御台と妾に美貌の女方二人が配されたのは、次年度、村山座の名跡を継ぐ九郎右衛門(平右衛門)を引き立てる為であつたのだろう。平右衛門は、「よき役目のみつとめたまは、諸げいしあげらる、事もあるへきやう」と期待されている。ところが、相手役を勤めた半太夫は「近年しつかりと

おも役をつとめたまはぬゆへ。ひいでたる事もなし」、兵藏は「すい分情をいたして…上文字に成給へ」と評されている。やはり、『松波』では、少将をめぐる御台と妾の凄まじい「恋争い」や「嫉妬事」が演じられなかった為、観客は物足りなく感じられたのだろう。一方、『松波』の山場（第二中入）で活躍するのは、大膳（かくげん）役の敵役小野山宇治右衛門と、しほがまだん六役の若衆方桜山林之介、ぜんにう法師役の立役音次郎三郎である。宇治右衛門は、第一中入では「似せ狸」になって、〔図4〕上段の図像の様な、屏風の上で倒立して歩くアクロバティックな演技も行ったと推量される。この「似せ狸」の演技で興味が引かれるのが、以下の評文である。

『野良立役舞台大鏡』（貞享四年正月刊）

中 小野山宇治右衛門 都一番のかたき役…いにしへは小の

山しづま今はぶんぶく若衆がたに毛がはへてかたき役（二二五

七）

岩瀬本『役者大鑑』

今ノ上々 かたき役 小野山宇治右衛門 今はぶんぶくわか

しゆがたに毛がはへて。かたき役の宇治右衛門なれば。男つききれいにすき者おほし○ほうひげに長がたなせいにはすこしあまれとも。よくさしこなし…これまでは前評のおもむき。いま又新評にいはく此人まなこつきでもつたかたき役としるへし。（元禄5・2、元禄6、一三三七）

太線部分の「ぶんぶく若衆がたに毛がはへて」は、「ぶんぶく茶釜に毛がはえて」のもじりと考えられ、「狸」が連想される。小野山しづまという名の若衆方であった宇治右衛門は、『野良立役舞台大鏡』の評文より、貞享三年には敵役に転向していて、「似せ狸」の演技で評判を得ていたと知れる。その時の「似せ狸」の演技が『松波』でも仕組まれたのだろう。¹⁸だが、元禄五年カ刊『合彩』以降、「ぶんぶく…」の評文はなくなっている。『大鑑』（元禄6年）の「新評にいはく此人まなこつきでもつたかたき役」との評文より、宇治右衛門は、持ち前の大きな目での睨む演技に工夫を凝らしていたと思われる。元禄六年三月刊『野良関相撲』¹⁹には「眼玉をひつくりかへしては梢のからすも睨おとし」（二五四二）と評されている。宇治右衛門扮する〔図1〕右下、〔図5〕下段左側に描かれた頬髭の大膳（かくげん）の目は、大きく印象的に描かれている。第二中入で、この宇治右衛門と対峙するのが、〔図5〕下段右側に描かれている、しほがまだん六役の若衆方桜山林之介である。貞享三年霜月刊『難波立聞昔語』²⁰に「橋か、りより御出のめもとに鹽が有」「口跡前代未聞の出来物。難波のわかしゆ方。随一」（二二〇八）と記された林之介は、『大鑑』と『合彩』では次の様に評されている。

岩瀬本『役者大鑑』

今の上上 若衆かた 桜山林之介 目に恋をもたす若しゆ…

松なみ少将おとろき
にせたぬき
にせたぬき
くらくらんとたぬきに成

大ぜんかける
松なみ少将
りしやういんうたれ
くらくらんとたてをいふ



〔図4〕『松波少将通車』七オ

しやうげんが侍
しやうげんまてといふ
子かた山八三郎
おらんが小軸くろかみ
くらくらんとつ立つる



〔図5〕『松波少将通車』九ウ

(大阪大学附属図書館、赤木文庫所蔵)

クリエイティブ・コモンズ表示-継承 4.0 国際ライセンス (CC BY-SA)
<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/deed.ja>

此君をみて鹽をはかるに…八合はこぼして正味二合ならてはの
 こらず。その鹽みな林の介が目もとにこぼれかゝるといへり○
 上るりよし。そのかみさゝ木大かゝみの道ゆき(元禄5・2、
 一三六〇)

『役者大鑑合彩』(元禄三年春刊「いろは丁」)

若衆かた 桜山林之介 津のくにの、名物わかしゆとはこれ

なんめり、…ながいつめひらきおもしろく、まづ武道りこんに
 みへてよし、…此人めづかいにてしぬると沙汰するゆへ、しげ
 ふめをつかはる、(一四〇一)

『松波』での桜山林之介の役名が、「しほ(鹽)がまだん六」と
 されたのは、評判記での「めもとに鹽(稿者注、愛嬌)が有²¹」とい
 う評文が意識されたからであろう。また、第一中入冒頭で念者の蔵
 人の浮気に愠氣した後、仲直りする場面は、『合彩』(「いろは丁」
 に記された林之介の「めづかいにてしぬる」演技を見せる為、また、
 第二中入での大膳の偽宣旨を暴く詰め開きの場面も、『合彩』(「い
 ろは丁」)で「ながいつめひらきおもしろく」と評された林之介の得
 意芸を生かす為に仕組まれたに違いない。

また、第二中入でだん六と共に大膳を追い詰め、第三で親の敵大
 膳を討つ、ぜんにう法師役の音羽次郎三郎は、『合彩』で「ひつじ
 の年(稿者注、元禄四年)上京してむら山座のおも役をつとめたまふ
 事まづもつてはまれ也」(二四一〇)、『野良関相撲』では「村山座へ

はじめてのぼられし時いつたんあたりたるもお手柄…又ふるき難波にくたり太夫本の仕合」(一五四二)と記されている。『松波』は、二人の大坂役者を活躍させる作でもあったのである。

一方、家老のたに藏人役を演じた立役藤川武左衛門は、『大鑑』(元禄5・2)で「みやことこ夏のぶだうかたにて村山座のつきもの」だが「見えたたけの役者」(一三三七)と評されている。『松波』でも村山九郎右衛門(少将役)と桜山林之介(しほがまだん六役)の引き立て役に回っている。だが、彼は数年後、敵役に転向し、元禄一二年、京、都万太夫座二の替『けいせい仏の原』で、娘の為に悪事を働く乾介太夫役を演じて以後、近松歌舞伎に常連する役者となっていることは付記しておかねばならない。

第三では、道外方が活躍する。(図6) 上段右端には、安楽寺和尚が、小僧に葉ではなく土砂(加持祈禱した砂)を誤って飲ませた為、小僧は萎えるという滑稽な場面が描かれている。和尚役を演じた天上又右衛門は、『大鑑』(元禄5・2)に「三十丈の天じやうへもくびのつかゑるやうなせい也」(一三七二)、『野良閨相撲』では「ときくおかしき事をいはる、も平生貞つき」(一五四二)と記される道外方だが、絵入狂言本は第三の筋や台詞を大幅に省略するので、関所を通るため、殿に仕立てられた和尚が、半道方田島半兵衛扮する百姓に詮議される場面でのやりとりが不明なのは残念である。

大団円では、「似せ狸」になって少将に討たれた隠居の亡魂が現れ、「くくうをかけり うらみをなす」。この場面は(図6) 左上の

図像より、かるわざ長崎色の介による「二つ縄」の曲芸で演じられたと知れる。挿絵には、「二つ縄」の上に立っている色の介が描かれているが、その余白には「二つなはをわたりさまくきよくをす」と記されている。(図7) (図8) は、時代の下るからくりの資料だが、これらの図像に見られる演技も行われたと推量されよう。²²⁾

第三の大切が軽業の曲芸というのは珍しい演出である。

以上、役者評判記で『松波少将通車』を演じた主な役者の芸風や評判を採った結果、松波家のお家騒動と城右衛門(ぜんにう法師)の敵討を描く『松波』は、京で人気の敵役小野山宇治右衛門と元禄四年度、京、村山座に出席した大坂の人気若衆方桜山林之介、立役音羽次郎三郎とを対峙させ、彼らの得意芸を生かすよう山場(第二中人)が仕組まれた作品であることが確認された。

だが、『松波』の主人公松波少将役は、次年度、村山座の名代兼座本を継ぐ村山九郎右衛門に配されている。冒頭場面数々の恋愛遍歴で名高い『伊勢物語』のモデルである在原業平を主人公とした浄瑠璃『河内通』が利用されたのも、九郎右衛門に「よき役目」を演じさせる為だったと思われる。

すると、注目されるのは、『松波』第一口明と『河内通』第一における、以下に示す異同箇所(表3)の網掛、ゴチック体部分)である。

かるわざ長さき色の介
 「丸竹をわたる」
 「二つなはをわたりさま」
 いんきよばうこんあられ
 「かるわざ色の介」

少将まこと成
 おしやう侍のていと成
 大せんさいこ
 城右衛門かたき打
 のたにくらんど



あんらくじのおしやう
 こぞうとしやのみなへる
 まきの丞きめる
 おつねたびつかれ
 くらんと女方おらん

かた山八三郎
 くらんとが女方
 てかけおつね
 小性まきの丞
 少将のみだい所

〔図6〕『松波少将通車』十三オ・十二ウ（大阪大学附属図書館、赤木文庫所蔵）

クリエイティブ・コモンズ表示-継承 4.0 国際ライセンス (CC BY-SA)
<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/deed.ja>

『河内通』
 井筒は男姿なのを幸い、夫業平の妾白露の心を試そうと白露に濡れかかるが、白露は二世かけた男がいると言う。その男（業平）を討つと井筒が駆け出すと、白露は命かけてと井筒の刀に縋り付く。井筒は白露を認める。



〔図8〕『梯曲伊達姿』八オ

（国立国会図書館所蔵）



〔図7〕『京掛略乱曲』八オ

（国立国会図書館所蔵）

『松波少将通車』

少将御台が女と明かして市原野に來た事情を話すと、少将妾おつねは、騙されたと言つて子供を連れて來させる。おつねは、白河での少将との馴れ初めを語り、奥様はいないと少将が言つた故、都に上つたが、斯くなる上は、尼になると言う。

何故なら、『松波』のこの妾おつねの台詞、及び、少将とおつねの人物造形は、近松浄瑠璃『天智天皇』が描くそれらと類似しているからである。以下、『松波』と近松浄瑠璃との関連を指摘していく。

五、『松波少将通車』第一口明と近松浄瑠璃

『天智天皇』第三における人物造形の類似

貞享期（一六八四―一六八八）、近松は、謡曲、舞曲、古浄瑠璃などの先行作に依拠しつつも、それらには登場しない二人の女性を、新たに自作の時代浄瑠璃に配し、主人公をめぐる二人の女性の「恋争い」を見せ場とした。

『出世景清』（貞享二年、竹本座二の替）の小野姫と遊女阿古屋、『薩摩守忠度』（貞享三年十月、竹本座）の菊の前と海女三日月、『主馬判官盛久』（貞享三年十月以後、同四年正月以前、竹本座）の常夜の前と海女曙と、二人の女性の一方は高貴な姫や奥方で、他方は賤の女や遊女であった。⁽²³⁾ 近松はこれらの作品の中で、二人の女性の恋敵に対する激しい嫉妬心や競争心を描いた。

ところが、元禄初年になると、近松は、『せみ丸』や『天智天皇』で、男主人公の不実な「偽りの言葉」や浮気によって心乱される女性達を描き始める。⁽²⁴⁾

五段物時代浄瑠璃『せみ丸』第一・第二・第三の筋は以下の通り（太線部分で男主人公の「偽りの言葉」を、波線部分で心乱される女性の心情が描かれた箇所を示した。以下、同様）。

蟬丸の北の方は、蟬丸と夫婦の語らいがない。北の方が長枕を二つに切つて蟬丸に恨み言を言うと、蟬丸は「出家をのぞみ一生不犯の願」を立てていると言ひ逃れる。実は蟬丸には、直姫という賤しい身ながら子までなした恋人がいた。蟬丸が直姫と交わした誓紙を見た北の方は、狂いわななき館を出、宇治橋姫の宮に、三つの鉄輪に瞋恚の炎を燃やし、丑の刻参りする。そこに同じ姿の女（芭蕉）が来て、二人は怪氣講を始め、直姫を呪つて釘を打つ。これを見ていた蟬丸のめのと清貫が北の方を諫めると、北の方は死んで報いると言つて川に身を投げ、亡骸は蛇身に変じ水底に消える。芭蕉が清貫に直姫への怨みを吐露すると、清貫は芭蕉を刺す。芭蕉は蟬丸に「偽り多き御一言。誠と思ひ身を焦がし恋に心を悩まして。あらね思ひに狂ひしも。たゞ一筋に思ふ故：君が為悪しかれとは祈らまし。」と言ひ、儚くなる。蟬丸は数多の女の嫉妬の恨みの為、盲目となり、帝は、後世を助ける為、蟬丸を逢坂山に捨てさせる。

『せみ丸』は、主に加賀掾正本『あふひのうへ（葵上）』（貞享頃）と謡曲《蟬丸》が利用された作品である。それらを改変する近松の作意については、正木ゆみ氏が「近松浄瑠璃『せみ丸』の魅力―先行作撰取の様相を通して⁽²⁵⁾」で正鵠を得た論考をなされている。正木氏は、加賀掾正本（『あふひのうへ』等）は女の嫉妬を「ひがめる女の曠恚」と批判的に描くのに対して、近松作『せみ丸』は恋する女の哀れさ、切なさに焦点を当てて女の嫉妬を描いている。また、蟬丸は、美男故、女性に口説かれればその度によい顔をするが、平気で嘘をつく「当世風の浮気男」として造形され、「数々の女の思ひ嫉妬の恨御一身に迫り」盲目になるという、古浄瑠璃や近松初期の浄瑠璃では例がほとんど見出せない造形がなされていると指摘された。

一方、『天智天皇』は、主に加賀掾正本『平安城都遷⁽²⁶⁾』（延宝九年五月以前）と謡曲《采女^{うねめ}》を利用した五段物時代浄瑠璃である。

『天智天皇』第三の筋は、次の通り。

逆目王子に王位篡奪、横恋慕された大君と妻の花照姫は都を逃れる。春日社で采女に、逆目王子が探す「若き上人の夫婦つれ」かと問われた大君は、「我等は夫婦ならず」、兄妹と偽る。そこで、采女は宿を貸し、采女の父御酒の長は采女と大君に結婚の杯を交わさせる。姫が「腹立（大君の）袖引」くと、大君は「うろく」として（土器を）取落とすが、大君と采女が奥の亭へ行き、姫が覗くと、采女は下紐を解き、比翼の睦言が聞

こえる。姫が「道に背きし忍び寝ならば恪気は女の習ひ也。：夫婦といはぬ上からは采女において咎もなし。：恨むまい思ふまい。ふつ、と捨てふ」「明日二人の顔を見れば由なき邪気もおこるべし：猿沢の。池に身を投げ此世のほむらをやすめん」と猿沢の池に走ると、采女も来て、「名乗らせ給はゞかゝる恥辱は取まじきに。それ共存せず御床迄参りしかば：主有殿御と知らずして女の道を背きたる。悔やみといひ恥といひ生きてあらぬ我心」と語る。二人は一二を争い猿沢の池に身を投げる。大君は嘆く。

『天智天皇』でも、大君は花照姫とは夫婦でなく兄妹と嘘をつき、采女と床入りしている。しかし、本作では、大君の「偽りの言葉」が原因となって心を乱した花照姫は邪気を起こさないよう身を投げ、采女は主ある殿御と床入りし、女の道に背いたことを悔やんで身を投げるといった新たな女性像が創出されている。

さて、ここで、『松波』第一口明の、少将御台から市原野に来た事情を聞いた、妾おつねの台詞（『河内通』第一を改変した箇所）を見てみよう。当該箇所の本文は、以下の通りである。

（御台が）やうす一々の給へば、「扱はおまへは少将様のおくさまにてましますか。ゑ、扱はだまされた」とうらめしげ成かばせ也。（中略）「何をかくしませふ 少将様のおかよひなさ

る、あづまの女つねと申は、私が事でござります。少将様
しらかはへお下りなされし時、私が所へおやどをめされ、かり
そめのたはふれに此子ができました。少将様の仰には、おくさ
まはないとの給ひしゆへ、都へ上りし、只今のやうすを聞だま
されたとは申しました。かく申まするうへなれば、少将様の事は
ふつつりと思ひ切。是よりいか成山へも入。あまほうし共成心
てい也。此若は少将様のお子なれば、おまへの子と思召下され
なば、有がたふ候べし」と、やうすのこらずの給へば⁽²⁶⁾…

『松波』の少将がおつねに「奥様はない」と嘘をついた設定と、
御台から事情を聞き、少将に妻がいることを知ったおつねが尼にな
ると言う展開は、『天智天皇』の大君が、采女に「我等は夫婦なら
ず」と「偽りの言葉」を言った設定と、妻がいることを大君から聞
かされた采女が、主ある殿御と床入りして女の道に背いたことを悔
やみ、身を投げる展開に類似する。また、『松波』はここから、不
義者と間違つて御台を縛つた少将に助けを求められた妾おつねが、
「奥様はいないといったが」と少将に逆らう、おかしみある展開が
なされているが、『天智天皇』でも、大君と采女の杯事の場合で、
大君は妻の花照姫に袖を引かれ、うろうろと狼狽して土器を取り落
とすという観客の笑いを誘う場面が描かれている。

近松浄瑠璃（義太夫正本）は、現存する正本の限り、元禄二年五
月刊『津戸三郎』より後、刊行年月が記されていない。よって、

『天智天皇』は、江戸の説経太夫、天満重太夫の正本である元禄五
年三月吉辰版「天智天皇」（六段）が近松作「天智天皇」の改作と
見做されることより、元禄五年三月以前の初演と推定されている。⁽²⁷⁾
だが、「お山の歌う曲」として、『せみ丸』と『天智天皇』の道行が
載る元禄六年二月刊『茶屋諸分調方記』⁽²⁸⁾は、元禄四年正月成稿と
いう説があり、『天智天皇』は、元禄三年四月カ、京、都万太夫座
上演『金岡筆』との関連も指摘されている。⁽²⁹⁾

『天智天皇』が『松波』に先行する確証は得られないが、両作に
おける人物造形の類似は、注意が引かれるのである。

六、近松歌舞伎と富永平兵衛歌舞伎における

「恋争い」

元禄初年の近松が、歌舞伎で、男主人公をめぐる二人の女性の
「恋争い」を、どの様に描いていたかは、近松署名のある絵入狂言
本が現存しないため不明である。本稿第一章で示した通り、延宝頃
から作者として活躍していた富永平兵衛の歌舞伎も同様である。

だが、近松作『仏母摩耶山開帳』⁽³⁰⁾（元禄六年三月上演）第一では、
六田掃部（坂田藤十郎）の御台は、夫が室の傾城異国に馴染み屋敷
に帰らないので、夫を屋敷に戻す為、夫と異国との間の子を屋敷に
呼んだり、傾城高橋を請出して傾城の風を学んだりしている。同じ
く『今源氏六十帖』⁽³¹⁾（元禄八年一月上演）第一では、尼寺に許嫁ふか
草を追って来た住の江なるおの介（大和屋甚兵衛）は、ふか草から、

井つゝのまへしうしん
さへもんかけ付る
玉みつのしう心



〔図9〕『業平河内通三番續』九ウ

（東北大学附属図書館所蔵）

「以前は住江なるおの介様と云て、お国に本妻有と聞、今でも世に出給へば国へお帰りなされふ、時には私は捨てらるゝであらふ、なれば末も遂げぬ縁を結ばんよりはと存、：尼と成心底」と告げられている。六田掃部御台とふか草の造形は、『松波』の少将御台と妾おつねに通じる造形といえる。

次に、富永平兵衛作の歌舞伎を見てみる。『鹿島之要石』⁽³²⁾（元禄五年秋カ上演）第二では、夫（山下半左衛門）の前妻おすぎの子と間違えられ我子を殺されたおそめ（萩野左馬之丞）は、夫とおすぎが親しく語らい、自分は家を追い出されたことに激しく嫉妬し、おすぎを悪方に訴人している。その後、おそめは我子の敵でもある悪方を討ち手柄を立てるが、「女の恪気の深いは災ひと成物ぞ、以来を

たしなめ」と夫に諭されている。『業平河内通』⁽³³⁾（元禄七年春カ上演）第二でも、〔図9〕の通り、業平（桜山林之介）をめぐり井筒（袖崎歌流）と玉水（松本兵蔵）姉妹の執心（生霊）が凄まじい「恋争い」をし、その後、井筒はめのとに意見されている。本作では、『松波』で妾おつねを演じた松本兵蔵が玉水役、しほがまだん六役を演じた桜山林之介が業平役を勤めているのが興味深い。

この様に、元禄初期の上方では、二人の女の「恋争い」を描いた作品が、歌舞伎や浄瑠璃で競演されていた。その中で、加賀掾の浄瑠璃や富永平兵衛の歌舞伎は、男主人公をめぐる二人の女性の凄まじい「恋争い」や恪気（嫉妬）を見せ場とし、その恪気を主人公の夫やめのとがたしなめる筋を描いていた。

それに対し、近松は元禄初年に、前後は不明だが、自作の浄瑠璃『せみ丸』と『天智天皇』で「偽りの言葉」で浮気する男主人公を新たに描出し、『せみ丸』⁽³⁴⁾では、それ故に心乱され嫉妬に狂う女性達を描き、『天智天皇』第三では、「邪気を起こさないよう身を投げる女」と「妻ある男と契ったことを悔やみ身を投げる女」という独自の女性像を創出した。そして、その『天智天皇』第三に描かれた近松独自の「偽りの言葉で浮気する男」と「妻ある男と契ったことを悔やみ身を投げる（引く）女」に類似する人物造形が、『松波』第一口明の、加賀掾正本『河内通』を利用しなかった箇所（表3）の綱掛、ゴチック体部分）に描かれ、元禄八年の近松歌舞伎『今源氏六十帖』第一にも、それに通じる人物像が見て取れるのである。

従って、『松波』冒頭と『天智天皇』第三における人物造形の類

似は、『松波』の成立において看過できないと考える。そこで、もう一点、近松浄瑠璃と類似する『松波』の趣向を、次章で指摘する。

七、京、三座における「毒薬（酒）」の趣向の競演

『松波』第三では、少将妾おつねが少将配流先の筑紫へ赴く長旅の疲れで悪い、駕籠で通りかかった和尚に薬を貰うが、小僧が毒見すると小僧の手足は萎え、和尚は土砂と取り違えたと言う、道外方の見せ場が描かれている。

この「土砂で萎える」趣向は、現行歌舞伎でも人気の演目である「松竹梅湯島掛額」³⁵「吉祥寺の場」で、紅屋長兵衛が悪方武兵衛にお土砂を振りかけると、武兵衛はぐにやぐにやになる演出の初出といえ注目されるが、一方、元禄四年度、京の他の二座では、「毒薬（酒）」を飲んで幼子が死に、疑いを晴らす爲、その薬を毒見した者も死んでしまうという悲惨な場面が競演されていることも見逃せない。それらの作品と「毒薬（酒）」に関する筋は次の通りである。

『娘親の敵討』上之巻口明（元禄四年秋カ上演、京、早雲座）

赤松夫婦は道中幼子が患ったので、通りかかった勘介に薬を貰うが、薬を飲んだ幼子は血を吐き死んでしまう。夫婦に責められた勘介が残りの薬を飲むと、勘介も死んでしまう。³⁶

『四国辺路』第二中入（同年九月、京、都万太夫座）

高松八郎左衛門女房の母妙庵が、八郎左衛門（山下半左衛門）を殺す為、毒を入れておいた酒を、娘（養女）のお長が飲み、お長は死ぬ。妙庵が八郎左衛門が昨日くれた薬が毒だったと責めるので、疑いを晴らす爲、八郎左衛門がその薬を飲むと、五体がすくみ、悪方らいざん（片岡仁左衛門）に斬られ、井戸に投げ込まれる。だが、四国遍路の霊験で八郎左衛門もお長も生き返る。³⁷

元禄四年度以降も、「毒薬（酒）」の趣向は次々と競演されているが、「薬（実は土砂）」を飲むと萎える」という道化の演出は、『松波』独自のものといえる。

「土砂」は、密教の加持祈祷で用いる砂で、真言加持した土砂を死者や墓の上に蒔くと亡者の罪は除かれ、極楽往生できると仏書に記されている。例を挙げると次の通り。（傍線部分は稿者。以下、同様。）

『秘鈔問答』卷第三（『大藏經』第七十九冊 No.2538 頼瑠撰）

問。眞言功能如何 答。儀軌云。若有衆生隨處得聞此大灌頂光明眞言二三七反。經耳根者即得除滅一切罪障。殺衆生具造十惡五逆四重諸罪。猶如微塵滿斯世界。身壞命終墮諸惡道。以是眞言加持土砂一百八反。尸陀林中散亡者尸骸上。或散墓上。遍皆散之。彼亡者若地獄中

若餓鬼中若修羅中若傍生中。以一切不空如来不空毘盧舍那如来眞言本願大灌頂光明眞言神通威力加持土砂之力。應時即光明身及除諸罪報。捨所苦身往於西方極樂国土。……

また、署名がないため近松存疑作とされる古浄瑠璃『以呂波物語』（貞享元年三月、宇治座）でも、出奔、出家した光照と、光照を探す長旅の疲れで、高野山で息絶えた妻のいろは姫との劇的な再会の場面で、「土砂」が次の様に用いられている。

『以呂波物語』第四

慈悲は仏の本心なれば皆是其身の菩提の種。幸是に奥の院の加持土砂を持合たり。臨終に此土砂を一粒口に入れば三惡道を免る。めでたき後世の土産也。…（光照は）しばらく念誦合掌し土砂を含め衣の袖に水をしめし口に入。阿字本不生仏果菩提と宣へとも。心中には是ぞ妹背の末期の水…来世は一蓮托生と観念有こそあはれなれ。

高野山女人堂での心中事件を劇化した近松世話浄瑠璃『心中万年草』（宝永七年四月以前）末尾にも、「土砂の功德の眞言秘密」とある。ところが、地誌『雍州府志』（黒川道祐著、天和二年（一六八二）（貞享三年）には、次の通り、加持土砂を死者に撒くと、死者の筋骨は日を経ても、硬直しないと記されている。

『雍州府志』卷六 土産門上 土石部

土砂 處々山有之 然自古持律僧取梅尾山之土砂 清水洗淨數過 然後盛壺置護摩壇上 七箇日間加持之 是謂土砂加持 傳言撒加持土砂少許於新死之尸 則其筋骨雖歷數日不強直 有便納棺内也

『松波』が描く小僧が飲んで萎えた「土砂」は、『雍州府志』が記す「土砂」の効用を滑稽化したものといえよう。だが、仏書や地誌が、「土砂を散じる（撒く）」と記すのを、『以呂波物語』と『松波』は、「土砂を口に入れる（飲む）」と描写している。「土砂」を芝居に用いること自体が珍しい中で、さらに、「土砂」を口に入れる（飲む）と描く共通点より、『松波』の「土砂」を飲む趣向は、『以呂波物語』の「土砂」を口に入れる趣向の影響下のものと考えられるのである。

八、『松波少将通車』における近松関与の可能性

最後に、『松波』の仕組について検討を加える。柳原氏は、本稿第一章に挙げた論考で、近松歌舞伎の仕組は、①「お家騒動ものの悪人方は上（第二）の口明から登場している」②「第三は比較的事件が少なく、所作事で終わることが多い」と指摘され、そこから、元禄八年九月（一〇月、京、早雲座上演の近松作『水木辰之助餞振舞』第二（有馬の藤の怨霊事）は、元禄四年秋カ、京、早雲座上演の

『娘親の敵討』中之巻の版本を流用しているが、『娘親の敵討』は、仕組が右の近松歌舞伎の仕組の特徴に当てはまらない為、近松作ではないと考えられた。

一方、『松波』の仕組は、この近松歌舞伎の仕組の特徴に当てはまる。冒頭は『河内通』の筋を利用しているが、悪方大膳（かくげん）は第一口明の最後に登場している。第三では、道外方による比較的軽い見せ場の後、急テンポでお家騒動は収束し、敵討も成就し、大団円は所作事に準ずる軽業で終わっている。

元禄四年度、京三座で上演され、絵人狂言本が存する『娘親の敵討』（早雲座）、『四国辺路』（都万太夫座）、『松波少将通車』（村山座）のうち、『娘親の敵討』は近松作ではないと考察され、『四国辺路』は山下半左衛門の作かと『絵人狂言本総覧』は推測している。⁽⁴³⁾これらと「元禄期には役者も作者も座本との一年間の雇用契約は確実に守られ」「いずれの作者も自らが所属する座以外に執筆することがない」という土田氏の指摘に従うと、この年度、村山座に所属し、『松波』を作劇した作者は誰であったのか問題となる。

『松波』における近松浄瑠璃の人物造形や趣向との影響関係、及び、近松歌舞伎の仕組の特徴との類似性を考慮すると、『松波』における近松関与の可能性、もしくは、近松浄瑠璃が意識された理由等が、今後さらに検討される必要があると思われる。

貞享から元禄初年の上方歌舞伎の様相が知れる絵人狂言本の伝本は稀である。だが、この頃、近松は浄瑠璃と歌舞伎の両方を作劇し

ていた。よって、近松においては、浄瑠璃で評判を得た趣向を自身が関与する歌舞伎に流用すること、或いは、歌舞伎で当たった趣向を自作の浄瑠璃に利用することは自在であったはずである。その一方、近松の関与がなくとも、大坂の役者が座組に加わった京の芝居では、大坂、竹本座で評判を得た近松浄瑠璃の趣向が利用されることは十分あり得ただろう。

『松波』上演の翌年度（元禄五年度）、少将役を演じた村山九郎右衛門は、村山座の名代兼座本となる。そして、大坂、岩井座に出座していた初代坂田藤十郎を呼び寄せ、二の替「当麻万燈供養」で当たりを得る。近松は、近松の署名がある絵人狂言本の限り、元禄六年三月上演『仏母摩耶山開帳』から、宝永二年（一七〇五）、大坂、竹本座顔見世『用明天王職人鑑』で、竹本座の座付作者となる迄の間、坂田藤十郎の為に、専ら歌舞伎を作劇している。この近松と藤十郎との提携を考えると、元禄四年度から絵人狂言本に近松の署名が本格的に記されるようになる元禄八年度までの歌舞伎作者としての近松の動向からは目が離せず、『松波』に近松が関与した可能性は、完全に否定できないと思われるのである。

おわりに

元禄初年以前の上方歌舞伎の様相は、絵人狂言本や役者評判記の伝本が極めて少ない為、断片的なことしか知れない。しかし、『松波少将通車』（元禄四年度、京、村山座）に関しては、本作を含めて

同年度の京三座の絵入狂言本、及び、次年度の役者評判記が存し、冒頭場面では、宇治加賀掾正本『河内通』の筋が利用されている。それらを本作と対照した結果、以下の注目すべき事柄が見出された。

(一) 本作は、京で人気の敵役小野山宇治右衛門と大坂の人気若衆方桜山林之介、立役音羽次郎三郎の得意芸による活躍が仕組まれたお家騒動物だが、主人公松波少将役には、翌年度村山座の名代兼座本を継ぐ村山九郎右衛門が配されている。

(二) 本作冒頭場面では、浄瑠璃『河内通』の筋を利用した松波少将をめぐる御台と妾との「恋争い」が見せ場とされているが、『河内通』との異同箇所では、近松が自作の浄瑠璃『天智天皇』第三で創出した人物造形との影響関係が看取される。

(三) 元禄初期、「毒薬（酒）」の趣向が競演された中で、本作第三における「土砂を飲むと萎える」という独自の趣向は、近松存疑作『以呂波物語』第四の「土砂を口に入れる」趣向の影響が考えられる。

現存する絵入狂言本『松波少将通車』には作者の署名は見られない。成立事情を伝える資料の存在も聞かない。そして、何より歌舞伎の仕組は役者本位である。従って、本作の作者は、やはり不明と言わざるを得ない。

だが、本作は、『金岡筆』（元禄三年四月カ、京、都万太夫座）に続く、近松浄瑠璃『天智天皇』との関連が見出せる作品である。元禄初期、上方の歌舞伎や浄瑠璃は誰によって、どの様に作劇されていたのか、

また、元禄期、上方の歌舞伎と浄瑠璃の間には、どのような筋や趣向の流用（襲用）が行われていたのか、それらの様相を追究する為にも、そして、浄瑠璃の初演年月推定の上限下限の幅を狭める為にも、両者の関連はさらに精査していく必要があると考える。

絵入狂言本『松波少将通車』は、近松と坂田藤十郎の提携前夜の元禄四年度、京三座の絵入狂言本が現存する中で、近松浄瑠璃との影響関係が看取されることにおいて注目に値するのである。

註

(1) 江戸時代、歌舞伎の劇場は毎年十一月（京阪では宝暦頃から十二月）に役者の新しい顔ぶれによる座組で開場され、一年間、役者はその座に所属した。歌舞伎の年度は前年の十二月から一〇月で区切られる。

(2) 日本書誌学体系112『絵入狂言本総覧』、古典文庫409『上方狂言本七』を参照。

(3) 引用は、『歌舞伎評判記集成』第I期、第一巻、二四四頁（岩波書店、一九七二年）に拠る。なお、役者評判記の引用に際しては、ルビを省略した。以下、同様。

(4) 引用は、守屋毅編『増補役者論語』（徳間書店、一九七三年）、二五五頁に拠る。引用に際しては、ルビを省略した。

(5) 土田衛氏『考証元禄歌舞伎―様式と展開―』（八木書店、一九九六年）に所収される。

(6) 『国語国文』第二十五巻第七號（京都大学国文学会、一九五六年七月）に所収される。

(7) 前掲注（3）に所収される。引用評文の刊行年月は、宮本瑞夫氏『岩瀬本「役者大鑑」の成立』（『日本演劇学会紀要』15、日本演劇学会、一九七五年）に拠る。

- (8) 前掲注(3)に所収される。
- (9) 武井協三氏『役者大鑑合彩』の成立(『藝能史研究』56、藝能史研究会、一九七七年一月)で指摘される。
- (10) 東京音楽学校編、六合館、一九二七年。
- (11) 近世文藝資料6 横山重編『加賀掾段物集(附、宇治加賀掾年譜)』(古典文庫、一九五八年)に所収される。
- (12) 『古浄瑠璃正本集 加賀掾編』第二・第三(大学堂書店、一九九〇年・一九九一年)解題に拠る。
- (13) 川端咲子氏「宇治加賀掾段物集並に所収曲一覧」(『演劇研究会会報』36、二〇一〇年)を参照。
- (14) 絵入十七行本『河内通』の後印本(東京大学附属図書館所蔵)は、内題の「河内通」を削って「井筒」と埋木されている。『古浄瑠璃正本集 加賀掾編』第四の本書解題を参照。
- (15) 『元禄歌舞伎傑作集 下巻』(早稲田大学出版部、一九二五年)の『仏母摩耶山開帳』解説に、元禄六年度、大坂岩井座二の替「仏母摩耶山開帳」は、富永平兵衛作「丹波与作手綱帯」(元禄六年度、京村山座)の翻案で、「第一番目の第一場の如きは全然同一といつてもよい程で、彼の船頭勘介は此の源介に、彼の女房お菊は此のおらんに当り、おらんが三年越し封じられて居た胎児に産氣がつく趣向も彼と同様である。加之、おらんが惨殺されてから死霊となつて、自分の切口から生れた若君を育てて実父に渡す迄の仕組も同工異曲」と指摘されている。
- (16) 土田氏、前掲注(5)に所収される。
- (17) 土田氏『歌舞伎年表』補訂考証 元禄篇 其二の元禄四年項に、『四条河原名代改帳』の「元禄四年十月十八日、右名代(村山又兵衛 九郎右衛門ニ譲り申度奉)願、安芸守様御番所ニ而村山平右衛門と申名代御赦免被_レ成候、先_レ平右衛門儀者七郎右衛門と名_ヲ相改_メ申候」という記事が載る。
- (18) 前後関係は不明だが、同年度、京、早雲座上演の『二谷坂落』第二では、若女方水木辰之助がおきく(狐)役で「釣狐」と「しのだ妻」

- の翻案を演じ、立役大和屋甚兵衛が、夫の景清役で、恩愛溢れる「似せ狐」を演じている。絵入狂言本『二谷坂落』(東北大学附属図書館所蔵、宇7-791、国書データベース <https://doi.org/10.20730/100451268> (12))を参照。
- (19) 引用は、前掲注(3)に拠る。
- (20) 引用は、前掲注(3)に拠る。
- (21) 「目元に鹽(塩)がある」は、「塩の目」が意味されたと思われる。『日本国語大辞典 第二版』(小学館、二〇〇一年)は、「塩の目」を「目許を細めたあいきょうのある目つき。こどもの笑顔などをいう。」と記している。
- (22) 山田和人氏「竹田からくりの研究」(おうふう、二〇一七年)を参照。山田氏は同書で、伊藤出羽権掾のからくり絵尽し『京掛略乱曲』、『梯曲伊達姿』等を所収する国立国会図書館所蔵『古今撰集楽』は、元文(一七三六―一七四一)後半から宝暦(一七五一―一七六四)前半にかけての歌舞伎やからくりの絵尽しを収めていると指摘される。
- (23) 『出世景清』、『薩摩守忠度』、『主馬判官盛久』は『近松全集』第一巻(岩波書店、一九八五年)を参照。
- (24) 「せみ丸」、『天智天皇』は『近松全集』第二巻(岩波書店、一九八七年)を参照。引用本文も同書に拠る。なお、引用に際しては、節章ルビは省略し、適宜漢字を当てたところがある。以下、同様。
- (25) 『江戸文学』30(ベリかん社、二〇〇四年)に所収される。
- (26) 引用本文は、『上方狂言本 七』、六三―六四頁に拠る。
- (27) 『義太夫年表 近世篇 第一巻(延宝―天明)』(八木書店、一九七九年)、一〇頁に拠る。同書には、『鸚鵡籠中記』元禄五年五月十一日の名古屋屋興行の記録も記されている。
- (28) 未刊文芸資料 第三期5 朝倉治彦他編『茶屋諸分調方記』(古典文庫、一九五三年)解題で指摘される。
- (29) 平田澄子氏「浄瑠璃『天智天皇』の周辺―近松初期作品の制作過程を追って―」(『文教大学国文』7、一九七八年。『近松浄瑠璃の成立と展開』、新典社、二〇一〇年に再録)で指摘される。

- (30) 『近松全集』第十五卷(岩波書店、一九八九年)を参照。
- (31) 前掲注(30)を参照。引用本文も同書に拠る。
- (32) 『上方狂言本 五』(古典文庫295、一九七一年)を参照。引用本文も同書に拠る。
- (33) 『新群書類従 第三』(国書刊行会、一九〇八年)を参照。
- (34) 『大覚大僧正御伝記』(元禄四年〔推定〕、竹本座)第二には、川渡しを頼まれた高則が、雨夜の前の姿を見て濡れかかるが、そこへ女房が来かかり、雨夜の前に怪気する世話の滑稽な場面が描かれている。
- 『近松全集』第二巻を参照。
- (35) 『松竹梅湯島掛額』は、文化六年(一八〇九)三月三日より、森田座上演「其往昔恋江戸染」の「お土砂の場」と、安政三年(一八五〇)十一月七日より、市村座上演「松竹梅雪曙」の「火の見櫓の場」をつなげ、明治期に初演された演目である。
- (36) 近世文藝叢刊別巻3『翻刻 絵入狂言本集 上』(般庵野間光辰先生華甲記念会、一九七三年)を参照。
- (37) 前掲注(36)を参照。
- (38) 元禄六年三月刊『野良関相撲』袖崎歌流条、「毒酒を吞ての身かはり」(一五三六)、同年十一月、京、村山座顔見世『箱伝授』第二における市三郎が毒酒を飲んで切腹し、身替りになる趣向等。『箱伝授』は、前掲注(33)を参照。
- (39) 引用は、SAT大正新脩大藏経テキストデータベース、<https://zidzku-tokyo.ac.jp/SAT/>を利用した。
- (40) 引用本文は、『近松全集』第十三卷(岩波書店、一九九一年)、一四四～一四六頁に拠る。
- (41) 引用本文は、『近松全集』第五卷(岩波書店、一九八六年)、七三四頁に拠る。
- (42) 引用は、『増補京都叢書』第三卷(増補京都叢書刊行会、一九三四年)、一九二頁に拠る。
- (43) 『絵入狂言本総覧』目録、二四頁を参照。

【図版出典】

- 図1 『松波少将通車』三丁裏・四丁表、大阪大学附属図書館、赤木文庫所蔵・100、国書データベース <https://doi.org/10.20730/100109503> (7)・二〇二五年九月一五日取得。
- 図2 絵入十七行本『河内通』四丁裏・五丁表、天理大学附属天理図書館所蔵・911.7-イ297
- 図3 絵入十七行本『河内通』九丁裏・十丁表、天理大学附属天理図書館所蔵・911.7-イ297
- 図4 『松波少将通車』七丁表、国書データベース <https://doi.org/10.20730/100109503> (10)・二〇二五年九月一五日取得。
- 図5 『松波少将通車』九丁裏、国書データベース <https://doi.org/10.20730/100109503> (13)・二〇二五年九月一五日取得。
- 図6 『松波少将通車』十二丁裏・十三丁表、国書データベース <https://doi.org/10.20730/100109503> (16)・二〇二五年九月一五日取得。
- 図7 『古今撰集楽』第三冊、『京掛略乱曲』八丁表、国立国会図書館所蔵・235-5-315
- 図8 『古今撰集楽』第四冊、『梯曲伊達姿』八丁表、国立国会図書館所蔵・235-5-315
- 図9 『業平河内通三番續』九丁裏、東北大学附属図書館所蔵・宇7-792を改変。国書データベース <https://doi.org/10.20730/100451269> (1)・二〇二五年九月一五日取得。

附記

本稿は、演劇研究会例会(令和七年五月三十一日、於龍谷大学大宮キャンパス)の口頭発表に基づくものである。席上、御教示、御意見賜りました諸先生方、執筆に際してご指導賜りました大阪大学人文学研究科の中尾薫先生には、心より感謝申し上げます。